アウクスブルクでの日々

西村 紅葉

〇はじめに

私は人々の暮らしや文化に興味があり、日本だけでなく海外の生活や歴史に触れてみたいと思い、今回の派遣に参加した。初めて訪れるヨーロッパへの期待と少しの不安を抱えながら出発したものの、アウクスブルクで過ごした一週間は新しい発見の連続だった。本滞在記では、その中でも特に印象に残った出来事について振り返りたい。

〇一日目-アウクスブルクとの出会い

長時間のフライトを終えて、空港で私たちを迎えてくれたのは二階建てバスだった。車内には青リンゴやお菓子、炭酸水、ポストカードなどが用意されており、到着直後から温かい歓迎を受けた。青リンゴを丸かじりすることや炭酸水を日常的に飲むことは日本では馴染みがないため、それだけでもドイツらしさを感じることができた。まだ街に着いてもいないのに、すでに楽しい気持ちになっていた。

バスの窓から見える街並みも日本とは大きく異なっていた。建物同士が隙間なく並び、窓が多く、パステルカラーの外壁や特徴的な屋根が続いている。大学ではデザインについて学んでいることもあり、自然と建築のデザインに目が向いた。どうしてこのようなデザインになったか後から調べると、それらの建物には気候や歴史が深く関わっていることを知り、街並みそのものが文化を語っているように感じた。



最初の目的地は移動型遊園地のプレラーであった。移動型であるのに大きなアトラクションや派手な飾りで迫力があった。レストランに行くと昼からお酒を飲んでいた地域の方に話しかけていただいた。プレラーについて教えてくださり、この祭りが地域の人々に愛されていることが伝わって温かい気持ちになった。



次に消防団を訪問した。見学中に偶然出動要請が入り、隊員の方々が棒を使って二階から一階へ降り、わずか数分で出動していく様子を見ることができた。それほど素早く着替えを済ませて準備をしたということだ。私も消防服を着させていただいたが、予想以上に重く、市民の安全を守る仕事の大変さを実感した。



夕方はいよいよホストファミリーとの対面だった。実は渡航前にビデオ通話をしており、そのときから親切に接してくださっていたため会えるのを楽しみにしていた。とはいえ実際に会うまでは少し緊張していた。しかし、会うと七歳の妹が私の重いキャリーケースを運ぶのを手伝ってくれたり、車内でたくさん話しかけてくれたりしたおかげですぐに打ち解けることができた。

家では姉妹と一緒にカードゲームやおもちゃで遊んだ。特に印象に残っているのは

「Mogel Motte（いかさまゴキブリ)」というカードゲームである。ルールを覚えるだけでも難しかったが、七歳の妹がしっかり理解して遊んでいることに驚いた。大学の保育実習で、ドイツのおもちゃは想像力や思考力を育てるものが多いと学んだことがあるが、その理由を少し理解できたような気がした。

ゲームを終えると、庭を紹介してくれた。うずらが20羽ほどおり、ドイツの郊外ではウズラを飼育することがブームらしい。そのほかにも、トマト、いちご、キュウリなどの様々な植物を育てており、お菓子代わりに食べる物も自家栽培のものが多かった。私が過ごした部屋は屋根裏部屋で、まるで秘密基地のようなところだった。日本の住宅との違いも多く、家の中を見ているだけでも新しい発見であふれていた。



夜は家族みんなでバーベキューをした。ドイツの夕食は冷たい食事だと聞いていたのだが、温かいご飯をもてなしてもらった。ホストファミリーの紹介にはベジタリアンと書かれていたが、実際には母と姉だけがベジタリアンで、同じ家族でも食生活が異なっていることが興味深かった。

こうして迎えたアウクスブルクでの一日目は、新しい発見と出会いの連続だった。長旅の疲れもあり、その夜はシャワーを浴びるとすぐに眠りについた。

〇二日目-つながりを感じた日-

午前中に、長浜市とアウクスブルク市が姉妹都市になるきっかけとなった山岡氏の記念碑や、長浜通り、ボタニカルガーデンの日本庭園を訪れた。ドイツの街の中で「Nagahama」という文字を見たときは不思議な気持ちになった。現地の人々は長浜市がどこにあるかまでは知らないかもしれないが、この名前を見て日本とのつながりを感じてくれている人もいるのだろうかと想像した。



ボタニカルガーデンの日本庭園も印象的だった。話を聞いてみると元からのドイツの立地を生かしつつ、いかに日本らしく見えるかを熟考したうえで作られているそうだ。また、ドイツの庭師さんが毎日手入れしているようで、日本との友好関係を大切にされているように感じられてうれしかった。

次に訪れたのは、中世からシステムをほぼ変えずに存在している建物であるフッゲライ。一つの街のように機能しており、福祉だけではなく人々の暮らしを支える工夫を見ることができた。ドアベルのデザインが各部屋で違ったり、住居人が自身で飾りをつけたりして、各ドアに個性が見られた。どんな人でも生きる楽しさが保証されているようで温かい気持ちになれた。ここにも住居の工夫がしてあり、特に印象に残ったのは自由に本を交換できる本棚である。本を通じて人と人がつながる仕組みがあり、日本にもあれば面白いと思った。



午後には工事中の市庁舎を特別に見学させていただいた。黄金の間は想像していた以上に豪華で、天井画や装飾を見ているだけで時間を忘れそうだった。一方で、中央に置かれた木製の机にはどこか素朴な魅力があり、その対比が興味深く感じられた。

グランドホテル・コスモポリスでは、人と人との出会いを生み出す仕組みについて学んだ。移民や旅行者、アーティストなどさまざまな背景を持った人が利用し、人々の日常生活からさまざまな人と関われる仕組みづくりこそが他者理解につながるものだと学んだ。「このホテルは未完成であり、人との出会いによって変化していく」という言葉が特に印象に残っている。コミュニティデザインを学ぶ私にとって、多くの気づきを得られる場所だった。次は利用者として行きたいと思った。



帰宅すると、ホストファミリーの子どもたちがスパゲッティアイスを作って待っていてくれた。家族みんなで料理やお菓子作りを楽しむ様子から、家族の温かさとつながりを感じた一日だった。

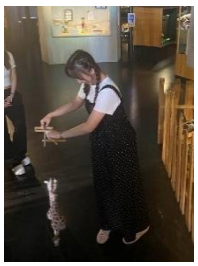
〇三日目-文化を学び、交流した日-

朝は長女と一緒に電車で集合場所に向かった。ドイツの電車には改札がなく、チケットを持っていればそのまま乗車できる仕組みになっていた。電車に乗り降りする際に混まずに利用できるのは良い点だが、無賃乗車する人はいないのか気になった。また、電車の中にコンセントプラグや大きなテーブルやゴミ箱が設置されており長期移動も快適に過ごせそうだと感じた。

市長訪問では、姉妹都市交流が長年大切に続けられてきたことを知った。多くの人の努力によって現在の交流があることを実感し、その輪の中に自分も参加できていることを嬉しく思った。



その後体験したディアンドルでは、伝統衣装の美しさに魅了された。年代ごとに装飾やシルエットが変わっており、一着一着の特徴を見つけるのが面白かった。



人形劇記念館では、人形の精巧な作りに驚いた。実際に操作を体験してみると想像以上に難しく、一つの動作にも多くの技術が必要だった。観客として見ているだけでは気づかなかった舞台裏の努力を知ることができた。

夜は料理教室に参加し、現地の方々と一緒にシュペッツレを作った。日本に興味を持っている方が参加しているのもあって、漫画やアニメの話で盛り上がった。また、ラジオ局の方が来ており、英語で自分の意見や長浜の料理について話す機会があったが、作り方までは知らず、うまく説明できない部分もあったため悔しく思った。また、異文化交流では相手の文化を知るだけでなく、自分たちの文化を伝えることも同じくらい大切なのだと実感した。この料理教室でも、ホストファミリーからもシュペッツレを作る道具をもらったので自宅でも頻



繁に作ろうと思う。

〇四日目−建物と自然に触れた日−



この日はアウクスブルク市を出て、片道一時間半時間ほどかけてオーストリアとの国境近くの場所まで向かった。移動中の車窓には広い草原が広がり、牛や羊がのんびりと過ごしていた。日本ではなかなか見ることのできない景色に、同じ地球でも暮らし方が大きく異なることを感じた。

アスレチックは山のふもとにあり、空と森の青と緑がとてもきれいで空気も澄んでいた。途中で見た川も底が見えるほど透明で絵に描いたような綺麗さだった。そして、長い滑り台で遊び、童心に帰ったような気持ちになった。

ノイシュヴァンシュタイン城では、ルートヴィヒ二世の理想が詰め込まれた空間を見ることができた。私は建築やデザインに興味があるため、装飾や空間構成を見ながら「なぜこのデザインになったのだろう」と考えるのが楽しかった。さまざまな文化が取り入れられていることも興味深かった。





ヴィース巡礼教会は外観と内部のギャップが印象的だった。外から見ると質素だが、中に入ると繊細な装飾やフレスコ画が広がっている。日本の寺社仏閣との違いを比べながら見学することができた。

帰り道にスーパーに寄った。ドイツのジャガイモは小さかったり、ズッキーニは日本のものより大きかったり、日本とは形が全く違うもので面白かった。また、ヴィーガン用のグミがあったので買って食べてみると普段のグミと変わらなかったことに感激した。そして、スーパーで一番驚いたのは、出口だ。レジの先に改札のような出口があり、購入手続きをしないと出られないような仕組みだった。他のスーパーでは、レシートにあるバーコードを読み込んで外に出る形式であり、万引き対策がされていた。

〇五日目−歴史と向き合った日−



午前中に訪れたWWKアリーナでは、普段は入ることのできない場所を見学させていただいた。選手は秒単位で行動が決められており、秒数まで書いてあるデジタル時計が選手控室にあった。グッズコーナーに行くと、二日目にショッピングモールで可愛いと思っていたジャケットがあり、二度と出会えないかもしれないと思い購入した。

その後訪れたダッハウ強制収容所は、今回の滞在の中でも特に印象に残った場所である。私は収容所について名前しか知らず、どのような人々が収容され、どのような生活を送っていたのか詳しくは理解していなかった。同性愛者なども差別の対象となり収容され



ていたことは衝撃的であった。また、当時の記録が非常に細かく残されていることにも驚いた。収容者の情報だけでなく、日々の生活や労働内容まで記録されていた。過去の過ちを隠すのではなく、記録として残し、そこから学ぼうとする姿勢を強く感じた。

実際にその場所を訪れたことで、歴史の重みをより身近に感じることができた。今、自分が平和な環境で生活できていることは決して当たり前ではない。過去を学ぶことの大切さを改めて実感した一日だった。

午後にはBMW博物館を見学した。私はもともと車に詳しいわけではなかったが、展示方法が非常に工夫されていて驚いた。過去から未来へとつながるストーリー性があり、製品そのものだけでなく見せ方にも強いこだわりを感じた。

夜は教会で行われたセレナーデを鑑賞した。ハープとバイオリンの音色には、テレビ越しでは伝わらない温かみがあった。また、演奏者のお二人の表情を見ることができ、貴重な体験であった。

帰りには白ソーセージを食べた。皮をむいて食べるという日本にはない食べ方も新鮮で、ドイツならではの食文化を体験することができた。

〇六日目-社会を支える仕組みを知った日-



最初に訪れた水道管理施設では、昔から続く水の利用方法について学んだ。大きな水車を使って水を運ぶ仕組みや、時代ごとに改良されてきた技術を見ることができた。特に興味深かったのは、建物そのものに歴史が残っていたことである。床のたわみや壁に残された落書きから、長い年月にわたって使われてきたことが感じられた。華やかな観光地ではないが、人々の暮らしを支えてきた場所だからこその魅力があった。

職業体験センターでは、日本との教育制度の違いについて考える機会となった。日本ではなかなか見られない場所で、安定して職につけるように二、三年で自分に合った職業かを見極める役割も担っている。私は将来について悩むことが多いので、このような仕組みがあれば自分の適性を見つけやすいのではないかと感じた。

夜にはフェアウェルパーティーが行われた。長浜市からはクイズと福笑いと名札などをプレゼントした。名札のプレゼントでは、参加者の名前を漢字に当てはめることが1番難しく、素敵な意味にもなるように考えながら工夫して書いた。ホストファミリーも漢字を書こうとしていたが、太くなった部分を何度もなぞって再現しようとしていた。海外の方から日本語はどう見えているのか気になった。帰り道には偶然花火を見ることができ、三人で遠回りして帰ったのも思い出の一つになった。



〇七日目-家族になれた日-

この日はホストファミリーと過ごす最後の一日だった。これまで一日一緒にいることはなかったので、楽しみである反面、会話が弾むかどうか心配であった。朝食では前日に家族が作ってくれたケーキをいただいた。



ウルムでホストマザーの叔父さんと合流し、案内していただいた。最初に向かった先はウルム大聖堂で、高さ 141m もあり 768 段の階段をのぼって頂上へ向かう。何百段もの階段を登ることは想像以上に~~登るが~~しんどかったが、ファミリーたちとたくさん話しながら登った。頂上からの景色も素晴らしく、ドナウ川やウルムで有名な建物を見ることができた。

私の希望で美術館や街歩きにも付き合ってもらった。現代アートを鑑賞したり、アンティークショップをのぞいたりした。街を歩いているとき、ホストファミリーが当たり前のように隣を歩き、景色や建物について教えてくれた。長女は腕を組み、次女は私のかばんについていたキーホルダーで遊びながら歩いていた。本当の家族の一員になれたようでとても居心地の良い時間だった。



夕方にはレストランでデザートを食べた。私はキャラメルナッツのクレープみたいなものを食べた。みんな一口ずつ分けてくれたが、どれもおいしかった。しかし、みつばちが卓上を飛び回って避けながら食べるのが大変だった。普段の食事もジュースの甘さに惹かれてよくミツバチがやってきて、コースターをコップの上に置いて飲み物を守っていた。

家に帰ると 24 時を回っていた。姉が一緒にラーメンを作ろうと誘ってくれた。簡単に作るのだと思っていたが、具材を切るところから始まり、予想以上の大仕事だった。食べ終わった後は姉と雑談をした。最終日になる頃には、最初は聞き取れなかった英語も少しずつ理解できるようになり、自分の考えも伝えられるようになっていた。その成長を実感できたことも嬉しかった。



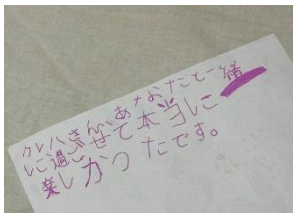


そのあとは、終わっていなかったパッキングを進め、ホストファミリーへ手紙を書いて気づけば朝の四時前になっていた。

〇八日目-おわりに-

いよいよアウクスブルクを離れる日となった。出発前、ホストファミリーから手紙やシュペッツレを作るための道具をいただいた。長女からはシュシュや香水、次女からは手描

きの絵をもらった。その絵の裏には日本語でメッセージが書かれており、とてもうれしかった。改めてこの家族と出会えて、一緒に過ごせてよかったと思った。



アウクスブルクで過ごした一週間は、建築や文化、歴史を学ぶだけでなく、人とのつながりの大切さを実感する時間だった。特にホストファミリーとの生活は、観光では決して得られない経験だったと思う。



今回の派遣で学んだことや感じたことを大切にしながら、これからも様々な文化や人々と関わり、自分の視野を広げていきたいと思う。

〇長浜市の交流事業に協力できること

今回の派遣を通して、姉妹都市交流は行政同士のつながりだけでなく、一人ひとりの交流によって支えられていることを実感した。私はホームステイを通してホストファミリーと過ごし、一緒に食事をしたり、街を歩いたり、夜中にラーメンを作ったりした。特別な観光ではなく、こうした日常を共有した時間が最も心に残っている。

また、料理教室では長浜の郷土料理について質問を受けたが、うまく説明できない部分もあった。この経験から、異文化交流では相手の文化を知るだけでなく、自分たちの地域の文化についても理解を深めておくことが大切だと学んだ。

今後は、長浜市が実施する国際交流事業や海外からの訪問団の受入れ事業に積極的に参加したい。私自身がアウクスブルクで温かく迎えてもらったように、訪れた方々に長浜の魅力を伝えられる存在になりたいと思う。また、派遣経験者として体験談を発信したり、交流イベントや料理教室の運営補助に参加したりすることで、姉妹都市交流の魅力をより多くの人に伝えていきたい。

今回生まれたつながりを一度きりのものにせず、長浜とアウクスブルクを結ぶ架け橋の一人として、これからも交流の輪を広げる活動に関わっていきたい。